
蜃気楼

沙山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜃気楼

【Nコード】

N3705G

【作者名】

沙山

【あらすじ】

全ての戦いが終わった東の里。失った物の穴埋めを求める少女と、それを受け止める青年の話。天誅式／力丸×彩女↓龍丸

(前書き)

天誅式の龍丸↑彩女×力丸カプ妄想文です。

出来るだけ過激な表現は控えていますが、性的なものを連想させる表現が有りますので、性的な描写に極度の不快感を抱く方は、このままブラウザバック（戻る）をして下さいますよう宜しくお願い致します。

不快感を抱かない方は、稚拙な乱文ですが、どうぞお読み下さい。

——ミーンミンミンミン……
——ミーンミンミンミン……

微睡みから一早く抜けた少女が呟く。暑い……と。

横でくつろぐ青年が囁き問う。喉が渴いたかと。

少女はカラカラに渴いた粘膜をすり合わせコクリと頷いた。

音もなく青年は立ち上がり水を取りに行くと、少女はゆるゆると体を起こす。

着物が投げ捨てられ、辺りでだらしなく店を開いている。

ぼんやりとした頭に一つの言葉がよぎる。

“ 嗚呼、一線を越えてしまったのか…… ”

腹に手を遣る。どこか違和感を感じた。

ふと腕に菌形を見つけ、しげしげと眺める。

額に竹筒を出され、見上げると、いつもの微かに不機嫌な青年の顔があった。

「……水だ」

「ああ、ありがとう」

カラカラに喉が渴いて仕方がなかったので、遠慮なく口を付けた。

チロチロと、口の端から顎、首に胸へと水が流れたが、気に止めず飲んだ。

喉を通る心地の良い冷たさに、ぼんやりとした頭が冷やされ、徐々に澱んだ思考もハッキリとしてきた。

昨日は朝までこの仏頂面な男と交わっていたのだ。

何もかも終わり、冷めやらぬ劣情と、行き場の無い悲しみが、身近なこの男との交わりを望んだ。

淡々と——行為を思い出す。

よく見れば、体中の赤い痣も、齒形も、袴だけちゃっかりと着て水を差し出したその腕の先：肩に齒形が付いている。

十代後半の均整の取れた体は疲れ知らずと言わんばかりに横に寝転がるやこちらをじいっと視ているのだ。

気だるさすら感じないのだろうか。こっちは腰が痛み、股間が軋むというのに。

その視線が顔ではなく、水の滴った胸や腰を珍しく熱の籠もった目で見ているからタチが悪い。

「なにさ」

どうしようもなく渴いた喉を潤す事を先決したいのに、珍しく熱の籠もった視線で見詰めるものだから、思わず聞いてしまう。

「こぼれてるぞ」

「うるさいね。喉が渴いて仕方ないんだよ」

「足りないならもう少し潤してやろうか」

男は竹筒に口を付け、水を含む。予想は付いたが、体の気だるさに抵抗する気力がない。

髪を掴まれ後ろに押し倒され、口付けられる。

少し温くなった水が流れ込む。やがて熱い舌が口内を這い回ると、空いた片手で胸を弄る。

慣れた手付きで、揉み込み、先を弄る。

触られる度に跳ねる体を抑えられず、この男に良い所を知られてしまった様で、どうもばつが悪い。

剣術も忍術も学も飲み込みの早いこの男が成せる技なのだろう。

女の弱いところを的確に突く。

「んん…ッは…また、するの…ッ…かい？これじゃ…あ、あん…獣みたいじゃないか……」

「……」

唇が首筋をなぞる度、骨張った手が体を舐める度、ぞくぞくと痺れに似た感覚が全身を走る。

指の動き一つですら、頭の中が白くなる。

この男は一体何時こんな技を覚えたのだろう。自分以外の女を何人も抱いたのだろうか。

嗚呼、どこか口惜しい。

口惜しさが口から出そうだったので、肩に噛み付いて置いた。

「……りき、まるう」

「なんだ？」

「もう、もう…何もかも…忘れさせておくれ」

亡くなった優しい人を思い出さなくても良い様に、目の前の仏頂面を見つめられる様に。

前に進む切欠をこの男に求めたかった。

野暮ったい言葉をこの男の口から聞くのはこそばゆい。

少しバサついた銀髪を弄る。

こんな目立つ髪で、東の頭目なのだ。まだ痛みそうな瞼の傷を撫でる。

優しい人の生きた証であり、この男の戦いの証なのだ。

本当にまだ痛むらしく、身を縮ませたので、口付けてみた。

「彩女……」

「なん、だい」

「お前は……いや、何でもない」

「…口ごもる…何て、アンタにしちゃあ珍しい…じゃないか…んんう！」

「……………」

ぎゅー…っと、抱き締められた。

蝉が五月蠅く鳴いているのに、こうもくっついたらただ暑いだけなのに、胸は早鐘のようで、繋がった部分は嫌に男を感じている。腹が熱い……

「お前が、忘れられるまで、俺がずっと居てやる。

お前が抱けと言うなら、今みたいにずっと抱いてやる。だから――」

腹の中をゆっくりかき回されていく。

アタイの大事な部分までかき乱されて、溺れそうになる。

波の様な心地よさが次第に大きくなり、真っ白に塗りつぶされて、何も見えなくなる。

「あああ、りきつ、まる……！あたい……あたい……んんう……！」

遠のく意識に、仏頂面なあいつの言葉が聞こえた。

アタイはただ頷いた様な気がする。

――ミンミンミンミン……

――ミンミンミンミンミン……

今でも蝉の鳴き声を聞くと、あの時の交わりを思い出す。

仏頂面なアィツは、アタイをどう思ってくれているのだろうか。

アタイは――……

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3705g/>

蜃気楼

2011年1月20日03時26分発行